

「伝える」ということ

～九州高校放送コンテスト宮崎大会に参加して～

村田 美映子（放送部顧問）

1 はじめに

奄美高校放送部について紹介します。

現在、部員は4名。全員1年生。（内1名は10月中旬入部！）

もちろん、放送に携わるのも皆初めてです。

4月、「大会があるけど、出てみる？」という私のことばに「出てみたいです。」と元気に答えてくれました。

放送の大会には、大きく分けて4つの部門があります。

○「アナウンス部門」

自分で取材し、その取材を元に自分で原稿を書き、1分10秒以上1分30秒以内で読みます。

○「朗読部門」

あらかじめ選定された本（だいたい5作品）から自分が読みたい場所を探し、1分30秒以上2分以内で読みます。

○「ラジオ番組部門」

ラジオの特性を生かしたドキュメントやドラマを6分30秒以上7分以内で制作します。

○「テレビ番組部門」

テレビの特性を生かしたドキュメントやドラマを7分30秒以上8分以内で制作します。

6月に行われた「第66回NHK杯全国高校放送コンテスト鹿児島県予選大会」には、三人が朗読部門に出場しました。

初めての大会で緊張しながらもなんとか作品を読み切りました。そして、放送を研究する多くの仲間と出会い、たくさんの刺激を受けました。帰りの船の中で、次は「ラジオドラマを作りたい！」と生き生き話す部員の姿がありました。

2 ラジオドラマへの挑戦

(1) 次の大会は、11月に行われる「第41回九州高校放送コンテスト鹿児島県予選大会」でした。生徒たちと話し、朗読部門に加えラジオ番組部門にも参加することに決めました。

朗読で自分が読みたい作品や場所を探す一方で、どんなラジオ番組を作りたいかの話し合いを重ねました。高校放送コンテストでは、高校生の視点で番組を制作することが求められます。自分たちが今何に興味を持ち、何を伝えたいか、繰り返し考えました。

様々な意見が出ましたが、生徒たちが自分たちにとって今一番関心があり作品にしたい素材は、「LGBTQ」問題でした。中でも、「Q（クエスチョニング）」についてまだまだ世間での認知度が低いということもあり、今回はこの「Q」を中心に作品を作っていくことになりました。

(2) 生徒たちは、さっそく「LGBTQ」について勉強するところから始めました。本校図書館の益田先生にもご協力をいただき、「LGBTQ」に関する様々な本を借りて読み、そこからどのような問題があるのかを考えていきました。

そうして、「Q」と自認している人たちが抱えている悩みや直面している課題等に真摯に向き合うことで、「Q」の女子高生を主人公にしたドラマを創り出しました。(台本参照)

- (3) 台本ができあがったら、次はBGMや効果音を決めていきます。NHKのクリエイティブ・ライブラリーからイメージに合うものを選び、なければ自分たちで創作しました。また、平行して配役を決め、台詞の音入れも行いました。初めてのことばかりで戸惑うことも多く、ときには失敗もありましたが、なんとか音声データがそろいました。

次は、集まった音声データを編集する作業が待っています。この作業が最も難しく、また時間がかかります。放送部OBの上畑愛華さん(情報処理科卒)に編集ソフトの使い方を教わりながら、少しずつ編集作業を進めていきました。

大会に作品を出品するためには、なんとしても締め切りに間に合わせなければなりません。本校の文化祭も重なり、思うように作業は進みませんでした。そのうえ、本校は離島という土地がら締め切り日の前日には郵送(速達)せねば間に合わないため、土日も朝から夕方遅くまでかかってひたすら編集作業を行いました。

こうして、「大会に作品を出品する」という目標を達成することができました。

- (4) 11月4日(月)大会県予選に向けて奄美を出発しました。翌5日は午前中大島高校放送部と合同練習を行い、午後は鹿児島工業高校にお邪魔し、合同練習を行いました。

そして迎えた大会当日。朗読部門に三人が出場しましたが、残念ながら入賞にはあたりませんでした。いよいよ番組部門の結果発表。次々と入選した作品が発表されていきます。「最優秀賞はエントリーナンバー5番、奄美高等学校『Q』。」会場が大きな拍手につつまれました。しかし、私も部員たちも何が起こったか分からず、呆然としてしまいました。

大会終了後、番組の審査をしてくださった先生から、テーマが非常に良かったこと、そして、生徒たちの自然な会話が印象的だったとおっしゃっていただきました。そのことを部員たちに伝えると、とても喜んでいました。が、喜んでばかりいられません。今度は12月に行われる本選に鹿児島県代表として参加するのです。期限までにできるかぎりブラッシュアップして、代表の名に恥じぬよう努力しようと新たな決意を固めました。

3 いざ、九州高校放送コンテスト宮崎県大会へ!

- (1) 奄美に戻り結果を報告すると、多くの先生方から労いのことばと九州大会に向けてのエールをいただきました。商業科の飛松先生は、審査員の方々が書いた講評用紙を分析してくださり、作品をよりよくするために生徒たちに具体的なアドバイスをしてくださりました。また、奄美から共に参加している大島高校放送部と作品の批評会を行い、互いのスキルを高めていきました。おかげで、県予選よりもさらに磨かれた作品を出品することができました。

- (2) 12月12日の夜、九州大会が開催される宮崎県に向け、名瀬港を出発しました。宮崎県下各地で高文連各専門部主催の大会があり、放送は都城市にある「都城市民文化ホールMJ」が会場になっていました。13日、鹿児島に到着し、JRで都城に向かいました。県大会でもその人数の多さに圧倒されていた本校放送部員たちでしたが、九州大会はさらに多くの仲間がおり、会場はものすごい熱気につつまれていました。さっそく受付を済ませ、明日からの日程を確認しました。

14日、いよいよ本番当日です。本校のエントリー番号は40番と発表順が遅かったため、アナウンスや朗読を少し見学した後、ラジオ番組の会場に入りました。

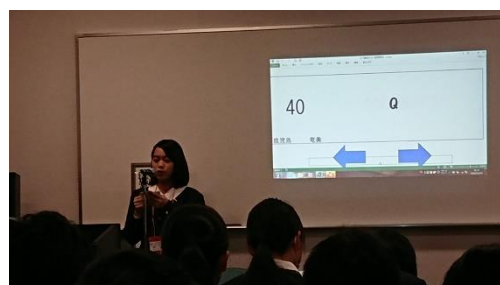
部長の情報処理科1年山田沙彩さんが、番組の制作意図を伝えます。会場に番組が流れ、「制作

は、奄美高校放送部でした。」というクレジットコールが流れた瞬間、やっと緊張が解けたように思います。他校の番組は、さすが九州大会だけあってどれも非常にレベルが高く、学ぶところがたくさんありました。生徒たちも、メモをとったりしながら真剣に聞き入っていました。

15日、大会ホームページにて決勝進出作品が発表されました。残念ながら、本校は決勝に残ることができませんでした。本校の番組講評用紙には、音入れに関する課題や、テーマの掘り下げ方について等、今後に生かすことのできる指摘がたくさん書かれていました。生徒たちは、決勝に残れなかったことを悔しがってはいましたが、同時に次回の作品制作に向けての思いを強くしていました。出発までの時間、ぎりぎりまでアナウンスや朗読、さらにはテレビ番組等見て回り、勉強しました。また、九州各県の放送部員たちとも交流し、よい刺激をたくさん受けていました。



都城ホールMJ入り口にて



制作意図を説明しています！

4 今後に向けて ～「伝える」ということ～

この九州大会を通して、生徒たちは本当に多くのことを学びました。何よりも大きかったのは、私たち放送に携わる者たちにとって一番大事な視点、すなわち「伝える」ことの大切さを再確認できたことだろうと思います。どんなに技術的に高い作品でも、そこに制作した者たちの思いや願いがなければ、人の心を震わす作品にはなり得ないということを改めて実感した3日間でした。

私たち奄美高校放送部が今後、人に感動を与えられる作品を創るためには、日頃から世の中の様々な事象にアンテナを張り、問題意識を持ち続ける必要があります。また、人にきちんと届くアナウンスや朗読をするためには、やはり毎日の基礎練習が欠かせません。

当たり前のことではありますが、日々の積み重ねを大事にししながら、次年度6月に開催される「NHK全国高校放送コンテスト鹿児島県予選大会」に向けて、がんばっていきます。

鹿児島県代表の
皆さんと共に



「Q」

制作 奄美高校放送部

BGM

タイトルコール 「Q」

SE 教室のざわめき

〈恋バナで盛り上がる二人〉フェイドイン

さおり 「もう～ありさ、メンクイ過ぎ～！」

ありさ 「じゃあ、そういうさおりはどうなの？」

さおり 「わたしは背が高い人！！」

ありさ 「分かるう。それ大事だよね～。」

「おとははどんな人がタイプなの？」

おとは 「わたしは……そういうの、ちょっと分かんないな。ごめんね。」

ありさ 「え～？おとは、いつもそればっかじゃん。ほんっと、つまんない！！」

さおり 「まあまあ（笑）。」

おとは 心の声（また、空気悪くしちゃった。でも、わたし恋バナなんて無理だし……。）

SE チャイム

SE 教室のざわめき

ありさ 「ねえ、さおり、ちょっといい？」

さおり 「いいよ。」

ありさ 「これからさ、恋バナするとき、おとは抜きにしない？」

さおり 「何で？」

ありさ 「おとはも自分の入れない話されるの、嫌だって！！」

さおり 「それもそっか。」

SE 走り去る足音

ありさ 「どうしたの？」

さおり 「今、おとはがいなかった？」

SE 場面転換

SE 教室のざわめき

りんこ 「へえ、そんなことがあったんだ。」

おとは 「うん……。ねえ、りんこ、やっぱり恋バナできないって、ヘンかな……。」

りんこ 「そんなことないよ！おとはは、自分の性別がよく分からないでしょ？だから、今はまだ恋愛にも興味持てないって言ってたじゃん。それは、別に悪いことじゃないよ。」

おとは 「ありがとう、りんこ。でも、ありさたちはそのこと知らないし……。」

りんこ 「う～ん。じゃあ、ありさたちにもそのこと、伝えてみたらどうかな？」

おとは 「えっ？！わたしがクエスチョニングってこと？無理だよ……。」

りんこ 「そうかな？だってわたしには打ち明けてくれたじゃん。」

おとは 「それは……りんこが先に自分はレズビアンだって話してくれたから……。」
りんこ 「大丈夫だよ！二人ならきっと分かってくれるって！！」
おとは 「うん……。」

〈翌朝〉

SE 鳥のさえずり
SE 自転車ベルの音
SE 人々のざわめき
ありさ 「おはよ～、さおり。」
さおり 「おはよ～。」
ありさ 「そういえばさ、今日の放課後、りんこがウチらに話があるって。」
さおり 「何だろう？」
ありさ 「さあ。」

SE 場面転換
SE 二人の足音
りんこ 「おとは、来たよ！」
おとは 「うん……。」
SE 扉を開ける音
ありさ 「りんこ、話って何？」
りんこ 「ほら、おとは！」
おとは 「う、うん……あの……。」
りんこ 「ちょっとおとはが言いにくいみたいだから、わたしから話すね。」
「最近、二人、おとはのこと避けてるでしょ？」
さおり 「別に避けてるつもりはないけど……ねえ？」
ありさ 「うん。おとはは恋バナ嫌いみたいだから、おとはがいないところで話してただけだよ。」
りんこ 「そのことなんだけどさ、おとはは恋バナが嫌いで会話に入らないわけじゃないの。ただ、おとはは自分が本当に女性なのか、よく分からないんだって。それで、今はまだ、恋愛にも興味が持てないみたい。ね？おとは。」
おとは 「うん。そうなの。」
ありさ 「は？何それ。」
りんこ 「LGBTQって聞いたことない？性的マイノリティーの人たちのことをそう表現するんだけど、その中のQ、これがクエスチョニングって言って、自分の性別や、どんな性を好きになるかが分からない人たちを指すことばなんだって。中には意図的に決めないって人もいるらしいよ。」
さおり 「え、ちょっと待って。じゃあ、おとははそのクエスチョニングってヤツだから、恋バナについていけなかったってこと？」
ありさ 「性別が分からないってどういうこと？おとはは女じゃん。何迷うことがあるわけ？男が好きか女が好きかも分かんないって……なんか気持ち悪いんだけど。」
さおり 「ありさ、ちょっと言いすぎ……」

ありさ 「だいたいさ、恋バナしたくないなら、最初からそう言えばいいじゃん。ウチらだって仲間外れにしようと思って避けてたわけじゃないし。」

おとは 「そうだよね……ごめんね。」

SE 走り去る音

りんこ 「おとはっ。おとは、待って。」

「何で友だちなのに分かってあげられないの？最っ低！」

SE 走り去る音

ありさ 「は～、もう何なの？あれじゃウチらが悪者じゃん。」

さおり 「それな。」

SE 二人の歩く音

さおり 「あれ？あそこにいるの、おとはとりんこじゃない？」

〈おとはのすすり泣く声〉

おとは 「やっぱり、わたし、おかしいのかな。自分の性も自分が好きになる性も分かんないなんて……。『女だ』って割り切れてたらどんなにラクだろう？普通に男の人好きになれば、友だちも怒らせずにすんだのかな……。」

りんこ 「おとは……おかしくなんかないから。もう泣かないで、ね。」

おとは 「わたし、ありさやさおりと友だちでいる資格ないのかも……。」

りんこ 「ばか。そんなことないって！」

ありさ 「おとは、あんなに悩んでたんだ……。それなのにウチ、ひどいこと言っちゃった……。」

さおり 「明日、一緒に謝ろう？」

ありさ 「うん。」

SE 教室のざわめき

ありさ 「おとは、今、ちょっといい？」

おとは 「……何？」

ありさ 「あの……昨日はごめん。ひどいこと言って……。あれから、二人で話したんだ。」

おとは 「そのことなら、もういいよ。二人とも、どうせ私のことなんか理解できないでしょ？」

ありさ 「正直、よく分かんない。ごめん。でも、このままケンカ別れになるのは嫌だし、おとはのこと理解したいと思う気持ちは本当なの。」

BGM フェイドイン

おとは 「……。」

ありさ 「今更ってカンジだよね……ホントごめん。」

おとは 「ううん、いいの。ありさなりに理解しようとしてくれたんだね。ありがとう。」

さおり 「おとはにいつか好きな人ができたら、また三人で恋バナしたいな！」

BGM フェイドアウト

クレジットコール 制作は、奄美高校放送部でした。